

25時行動委員会・富山

# 通信 9

2015.12.

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:http://25h-action.blogspot.jp/

2015.11.8 〈25時行動委員会〉

——「プロジェクト・〈ピープル〉の創り方」 序 (続)

トークセッション：

「〈ピープル〉が生まれ・・・????」 その3

以下は、「安保＝戦争法制反対」闘争を強行採決までの段階でどう評価するかを巡って、前回に引き続き論議した記録である。新しい運動スタイルをどう見るのか、68年から続く運動との接続はいかに可能か・・・立ち位置をめぐる、過去と未来の間を揺れ動く自分たちの在りようが、そのまま表れているという意味では、ライブ感覚溢れる「報告」である。

## ○はじめに

今日は、初めに、「安保＝戦争法制反対」闘争を強行採決までの段階でどう評価するのか——「〈ピープル〉は生まれたか???'という感じで、疑問符がついてしまうように思うが、その辺をどう思っているのかを、まず率直に話したい。

次に、白川真澄さんの「2015年安保闘争について—その意味と課題（覚書）」という文章がピープルズ・プラン研究所のホームページに出ていたので、それを取り上げることと、共産主義者同盟統一委員会という党派が出している文章があるので、それを批判的に眺めることをしたい。

そして最後に、これもピープルズ・プラン研究所のホームページに出ていた武藤一羊さんの

新しい著作の前書きにあたるものの5章を取り上げたい。それらを話題にしながら、プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」というものをスタートさせることの妥当性についても考えられたらと思っている。

## I. 「安保＝戦争法制反対」闘争の盛り上がりを見るか

### 1. 「生きさせろ」と「立憲主義を守れ」との隙間

- ・ 国会前に、人の数としては60年安保闘争以来の大きな数が集まったわけだが、人の流れとしては、再稼働阻止を掲げて官邸前に集まったその流れが、そのあと秘密保護法反対へと流れていき、今回の盛り上がりが続いていたように思う。確かにイラク反戦をピークとするそれまでの流れとはいったん切れているが、「3・11」以降の流れは、人々の動き方という意味では繋がっているように見える。00年代から、若年不安定就労層が急激に増加していき、その中で多くの人たちが自分の「生」の困難自体に直結して声をあげることが、リーマンショック前後あたりから日本の中でも広がる。

- ・ もう少し遡ると、1999年のシアトルの乱から始まった反グローバリズムの流れが世界的に広がり、日本でも、その流れが新しく出てきた人々をも含めてイラク反戦運動を担い、また08年の日本での反G8運動にも繋がっていくわけだが、それと「3・11」以降の反/脱原発や秘密保護法反対の流れとは別であるという風に考えた方がいいということだろうか。

- ・ そう思う。自分は、07年か08年だったと思うが、反貧困運動が活発に展開されていた頃に「フリーター」系労組が主催したデモに参加し、今回の国会前での抗議行動にも参加したが、参加しての感じ方はずいぶん違った。「生きさせろ」という声が街頭でストレートに出されるような、「生」の困難というものがもってる社会的な平面に直結したところで自分の表現を作っていくのとは異なり、今回の場合は、むしろ政治そのものに関わるような問題だったので、そのように参加者の声がナマで出てくるような運動ではなかったように思う。今回の動きの中でも、戦争に対する恐れや、自分の未来はどうなるんだろうという「生」の不安の感覚は間違いなくあったのだろうが、自分たちの「生」が脅かされていることに対する表現の直接性の在り方が、かなり違うのではないか。

- ・ 「生」の困難の中に多くの人が出て、それを何とかしてくれという思いでいることと、安倍の登場や、安倍がもっている戦争への衝動に対する危機感という二つのことが、過不足なく接続されてはいない。そのような意味で、「生」の困難の問題の社会性が、すべて汲み尽くされて政治の場面に表現されているわけではないのではないかと。そこをどうするのか。

- ・ その二つのことを一体のものとして考えるからその場に身を置いたのだろうが、それが「立憲主義を守れ」、「民主主義を守れ」というような一元的な言語に囲い込まれてしまったのではないかと。

- ・ 00年代の方は、それ以前と全く切れているわけではない。むしろ現在のものがその流れと

も切れている。生きることが抱える困難や、それが持っている社会性を今の政治表現がうまく集約しきれていないということではないか。生きる上での困難を抱えるものたちが、とりあえず安倍に反対するために国会前に集まり、政治に踏み込んで自分の言葉で語ろうとした。ただその声を集約すると「立憲主義を守れ」「民主主義を守れ」になってしまう。

・ 00年代と今の若い人の生きることの困難を抱えたありようは、基本的には変わっていない。安倍が戦争を招き寄せようとしていることに対して「ノー」の声を挙げたいと思っている。ただ、その声の挙げ方が、政治的スローガンやシュプレヒコールになると、「立憲主義を守れ」、「民主主義を守れ」というところに行きついてしまうことで、「生」の困難を抱えた人たちのありようが十分に表現されているのかという点についてはかなり疑問であり、まだその間に隙間がたくさんあるのではないかとということだろう。

・ 「総がかり」というネーミングに象徴されるように、多数派を目指そうという指向があり、それぞれの運動グループ間の違いが見えないようにして最大公約数的な形で取り組もうとするところがあった。

・ では逆に、今回の「安保＝戦争法制反対」闘争で「少数派」はいたのか？ 反対運動が高揚を見せたと多くの人が言っていて、60年安保闘争に匹敵するような数が動いた。しかも、動員ではなく一人一人の意志で動いたという見方がなされている。可能な限り多数を創りだすことが意識的に狙われていたし、そのときに多数であるということが見えるように、象徴として置かれたのが、シールズだったと思う。彼らはその役割をよく担ったということだと思う。しかし、少数派は逆にかなり見えなくなってしまった。

## 2、 あのペルー人がいた路上と国会前の路上との隔たり

・ もう一度整理すると、2015年に日本列島に生きているそれぞれの人の「生」の困難と戦争法案反対の声とがどういう関係にあるということなのか。

・ 象徴的にしか言えないが、戦争法案の審議の最終局面に入る段階と同時期に熊谷市であった「6人殺害事件」の「容疑者」とされているペルー人のことがとても気になっている。あのペルー人がいた路上と国会前の路上とは、すごく遠いもののように感じる。一体同じ路上なのだろうか。「生」の困難が「民主主義とは何だ」ということに表出されるならば、それは簡単なことではないか。国会前では声になっている。でも、ペルー人の場合は声にもならない。ただ生きたいという思いだけでたまたま前にいた人におつかった。立ちふさがったわけでもないのに前にいた人におつかってしまい、思わず刺し殺してしまった。そういう声にならない在りようが一方であったとすれば、そこでペルー人が見ていた路上、立ちすくんだ路上と、みんなが集まって、「終電は～時です」、「また明日も来ようね」と言葉を交わしている者たちの路上とは、まったく違ったものなのではないか。

・ 多数の人が街頭に出てきて現在の政治の進行に対して「ノー」という声を挙げる。その挙げ方に違いはあるにしても、声を挙げるという行為の多数性の上に立った営みが展開されてき

たことは間違いない。その多数性において、いいとは思えないことがなかったわけではないのだ。そのことを政治上に表現することは、どのようにしてあり得たのかというのが、先ほどの「『少数派』はいたのか」という問いの意図だった。多数性に異議を唱える政治表現はどこかに登場していたのか、自分たちに見えなかっただけなのかということの問題にしたかった。日本列島に生きている者たちの「生」の困難と全く乖離したところで立っていたわけではないにしても、その間に隙間があったのではないか。

・ そんなに簡単に〈ピープル〉が生まれたり、街頭がスイングしたりするわけがないと言えど、なにがしかの〈ピープル〉の片鱗にあたるようなものが芽を出したんだとか、街頭はスイングまではしなかったけれど、街路の浸透圧が変わるという場面がなかったわけではないと思う。

## Ⅱ. 白川真澄さんの「2015年安保闘争について—その意味と課題覚書」をどう読むか

### 1. 内閣支持率—制度圏へ・・・という運動のとらえ方

・ 内閣支持率が話題になっているブログが結構あり、これもそうだが、なぜそんなことを気にしなければならないのかが分からない。けれどもこれが、ある程度「左」の部分の最大公約数的な意見になっているのではないだろうか。

・ 白川真澄さんの「2015年安保闘争」という言い方が、まず引かかる。今回の動きを安保闘争と呼べるのか。全体的に現状に迎合的な感じがする。「世界的なデモや占拠の行動との同時代性が働いている」というのは、違うのではないか。ネグリの「宣言」という本で、オキュパイしているその空間に自分がいることが、自分を変えるとか、何も怖くないと感ずるとか、そういう感覚になると言っているが、自分が国会前に行ってもそういう感覚になることはなかった。広場や街頭をずっと占拠して、見ず知らずの隣りの人と討論するとか、運動の進め方を参加者全体で論議して決めるとかということが、各地の占拠運動について言われていたけれど、国会前に行っていて、そういう匂いはしなかった。世界的な伝播があるんだしたら、一番遅れてきたものが一番優れたものになっているはずではないか。現実とはそうっていない。

・ アラブの春からウォールストリート、台湾のひまわり革命や香港の占拠といった「世界的なデモや占拠の行動」にも連なっていると言っているが、闘いの空間での凝集の仕方が違う。それが引き起こされた直接的な要因はいろいろで、台湾のひまわり革命なんかは、中国との二国間TPPみたいな社会的な平面と政治的な平面の境目みたいなところで起こっていることである。つまり、ぶつかっている問題は個々に違うのだ。しかし、そこにつくられていく空間の連続性に目を向けて、ネグリは言っている。

・ 白川さんは、そうした占拠運動と連なっていると言いたがっているが、そこまでいえるのだろうか。世界各地での直接行動による民主主義の運動と並べている割には、国会前に集まっ

ているところに野党の議員がこのこやってくる「現在こうなっております」というのを迎える迎え方を含めて、極めて代表制の制度内民主主義と親和的である。その空間が非日常的でなければならないのに、数的には非日常だけでも極力非日常にいかないで日常的な場にとどまるように構成しようとしていたのではないか。

・ そのような面もあると思うが、運動をとらえるときに、それがどういう理念によってリードされたかとか、それを担ったグループはどこであったかというところだけで見る見方は、一面的なのではないか。そこに参加した人が無数にいる中で、その中の誰かにとっては、必死な思いで自分の日常を破ろうとして、何とか国会前に身体を運んでいたということなのかもしれない。運動思想で見るのか、集まった人が、何とか自分の日常を破って駆け付けるというような切実さで見るのか、どこで観るかということで見えるものはずいぶんと違ってくると思う。誰かにとってはキャンパスでバリケードを作ったとか、火炎瓶を投げたということとそうかわらない日常の破り方や、胸のときめきがあったのかもしれない。そういうものを集約できる運動思想であったかどうか、という問いでなければならないと思う。

・ 夜中にみんな帰った後で始めるシールズのリレートークは、素朴でよかった。20~30人ぐらいで、「自分はどうしてこの運動に参加したのか」を自分の言葉で話していたが、その在り方には、共感できた。

・ ともあれ、自分はそこで表出されたものが、日本列島で生きている人々にとって何であったのかということを外さないで考えたい。

・ この文章の最後にあるように、この運動から「制度圏」へどうやって運動を展開させるのかという考え方は、かなり多くの人にとらえ方の最大公約数的なものになっているのではないか。この良し悪しは別にして、多くの人に関心事はそこにあると、まずは受け止めておきたいと思う。

### Ⅲ. 共産同統一委員会共産主義者同盟ホームページ

「1468号（2015年10月5日）政治主張」を眺める

#### 1、 「巨大な自然発生性」と自分たちとの結合を謳う

・ 「第二章 戦争法案に反対する全人民政治闘争」という小見出しの「全人民政治闘争」というような言い方に、まず引っかかる。ここからは、少し引用しながら話そうと思う。

「それは、1960年の第一次安保闘争、1970年を前後する第二次安保闘争、これらの戦後史を画するたたかいを継ぐものとして組織された。この経験は、広く深いものである。ここではその特徴を概括しておきたい。第一には、「戦争をさせない1000人委員会」「解釈で憲法9条を壊すな！実行委員会」「戦争する国づくりストップ！憲法を守り・いかす共同センター」が中心となった「総がかり行動実行委員会」が東京を中心に編成され、人民の総結集の受け皿となったことである。この総がかり行動の集会には、民主党・共産党・社民党・生活の党と山本太郎

と仲間たちなどが参加し、議会内外を貫くたたかいとして組織された。それは、60年安保闘争における社共・総評を中心とした「安保改定阻止国民会議」のような位置をもつものであった。全国各地においても、総がかり行動のような結集構造が追求され、無数の活動家たちの努力によって最近にはない大結集が組織されていった。この構造は、戦争法制の廃止、安倍政権の打倒にむけて持続し、全人民政治闘争の基礎構造として継続していくであろう。また、そうしていかねばならない。」——長々と引用したが、「あなたたちは、ここまで『武装解除』するのか」と言いたい。

「第二には、戦争法案に反対する全人民政治闘争は、60年安保闘争とは大きく異なる特徴をもつたたかいとして組織されたことである。60年安保闘争の主力は、BUND全学連と総評に結集する労働組合であった。しかし、戦争法案に反対する全人民政治闘争においては、主権者としての意識にもとづき、さまざまな階級・階層の一人ひとりが自らの意思で立ちあがったことに大きな特徴がある。」——簡単に言えば、彼らがこれまで言ってきた階級も階層もなかったということなのだろうか。

「第三には、この全人民政治闘争に青年・学生たちが広範に立ちあがり、大きな推進力となっていったことである。たたかいの最終局面では、それは高校生・中学生にまで波及していった。その基底には、戦場に動員され、殺し殺されるのは自分たち若者だという危機感があった。とりわけ、SEALDsのたたかいには広範な青年・学生が合流した。SEALDsは、「戦後の平和と民主主義の防衛」「リベラル勢力の総結集」を掲げ、戦争法案を本気で止めると奮闘した。それは、これまでの階級闘争、左派勢力のたたかいの経験と地平から切断されたところで生みだされた青年・学生の巨大な自然発生性であった。SEALDsのリベラルな基調を批判することはたやすい。しかし、問題はそこにあるのではない。これまでの階級闘争、左派勢力のたたかいの経験と地平からの切断を固定するのではなく、結合させていくこと。立ちあがった青年・学生たちと左派勢力の合流を実現していくことこそが問われたのだ。そのことは、これからのたたかいに引き継がれていくべき大きな課題だということができる。このようななかで、われわれは反帝国主義派として全力でたたかいつつ、左派勢力の結集を呼びかけ、左派共闘をもって全人民政治闘争を牽引しようとした。」——新左翼の生き残りの発想のかなり典型的なものが見受けられる。

・ 「巨大な自然発生性」を分析していない。それがなぜ自分たちと切断されたところで生み出されたのかを問わなければならないはずなのに、そのまま手放しで自分たちの図式に当てはめて見ているだけではないか。

・ その「自然発生性」と自分たちの「目的意識性」が結合されなければならないとは、なんとも「上から目線」ではないか。

・ 「総がかり」にすべて任せているわけではないと言いたいのだろう。「左派結集を」と言っているが、実際にはほとんど何もできるわけではないのに。

・ 自分たちの使っている政治言語を組み替えるということは、ほとんどやっていない。自分たちは動かないで向こうから結びついてくることを認知すればいい、という構えでいる。それ

でいいのだろうか。

- ・ 二つの代表的な例として白川さんのものとこの文章とを挙げてみた。

#### IV. 武藤さんの「戦後日本における憲法平和主義の原理としての生成（5章）」

（P P 研ホームページより）を読んで考える

##### 1. シールズのいう「民主主義」という言葉

・ 最後に武藤さんのものだが、今回は武藤さんの「戦後日本における憲法平和主義の原理としての生成（5章）」という論文を取り上げる。ここから武藤さんの今回の「安保＝戦争法制反対」闘争についての評価を取り出して論じるということは、こういうものを扱う上でふさわしくないことをやることになるのではないか。しかもこの文章は、これから刊行されるものの一部分である。武藤さんの持論である「戦後日本国家の構成原理を安倍ではなく民衆がいかにか超えるか」という大きなテーマで書かれていることを承知の上で、あえて乱暴に今回の運動の評価に関わるところだけを抜き出すことになり心苦しい面もあるが、武藤さんにはご容赦願いたいと思う。

- ・ 少し長いが引用する。

「憲法平和主義が、戦後日本が生み出した独特の社会的な思想的財産であることは否定しようがない。それは日本社会のなかに、今日にいたるまで、広く薄く、むしろ常識として沈殿していて、権力の出方によっては、それが再び凝集して、権力に対抗する行動を呼び起こす動機となりうることは、安保法制を強行する安倍政権への抗議行動の爆発的広がりが、大きくこの価値観をバネとしていることに示されている。その中で注目されるのは、「平和と民主主義」意識の主要な担い手であった旧世代の人びとばかりでなく、その思想的伝統とはおそらく縦の線では切れたところで、安倍政権の常軌を逸した振る舞いに危機感を抱く若い世代の人びとが、一人一人の行動への動機をそれぞれ固有の言葉で表現しつつ、行動に立ち上がり、一人一人によびかけつつ行動を横に広げはじめたことだ。個人として自分と権力の距離、関係を確認、行動する。それはすでに権力との距離を確定している主体に一体化することで自分と権力の関係を確定するやり方とははっきり区別される。彼女ら、彼らの街頭での発言が、旧世代の心を打つのは、自分と政治の固有の結びつきを語る生きたことばが権力を撃ちはじめた場面に居合わせる感覚からであろう。大学生に続いて高校生がこの波に加わりつつある。」

ここで出てくる若い人びと＝シールズのいう「民主主義」という言葉——権力と向き合っ  
て権力を批判する、そういう主体として自分を立たせることにおいて、それを武器として使っ  
ている。

- ・ それは、既存の政治スローガンに自分を投影させて自分のありようを語るということはし

ないと言っているのではないか。党派が習い覚えた言い方で世界状況を語るのではなく、自分はなぜここに来たのかを話し、自分をさらけ出すことで共感を求めるようなあり方は、これまであまりなかったように思う。世界秩序を概念的に把握する在り方から切れてしまっていて、いざ政治に踏み込んで話そうとするとき、一生懸命探して「民主主義」という言葉を手掛かりにしたというような。全くそういう動きがなかった期間があったということからすれば、若い人が政治に踏み込んだという意味では、長いトンネルの向こうのかすかな光が見えたともいえるのではないか。

- ・ かなり勉強している彼ら／彼女らが、政治を語る言葉を持っていないというわけではない。ただ、人々を集合させるスローガンとして持っていないから、いろいろ駆使してみているというところではないか。

## 2、「平和価値基盤」が存在する証拠をシールズの言動に見るという逆転の発想

- ・ 武藤さんは、戦後日本国家の成り立ちを「原理的に超える」ということの現在の表われ方を言っている。今回の「安保＝戦争法制反対」の盛り上がりをどこで観ていくのかというときの見方を、たいへん深いところで観て、それを裏付けようというのがこの文章なのだと思う。これについて思うことは？

- ・ この列島上に生きることの「生」の困難が「安保＝戦争法制」を巡る政治的な対決の中に、どこまで集約されたことになり得ていたのだろうかということを問題にしてきたが、武藤さんは、原理というものがむき出しのままあるのではなくて、むしろどういうところに原理の基盤にあたるものが存在しているのかを明確にした。それが、武藤さんの今回の運動の総括にもあたるのだと思って読んだ。

- ・ 「私は、安倍政権の戦争国家化への暴走への抵抗を契機に、前述のような民衆の自立圏をもたらす新しい運動圏の出現の可能性が生じたと感じている。」というところで、可能性があると言い切るわけではなく、「それはむしろ必要性だ」といっているように、かなり微妙な言い方になっている。いろんな運動が土壌にあるという風に思いたい、自分にはそこまでは言い切れない面もある。

- ・ なぜ武藤さんの言葉が明るく力がある言葉なのか。武藤さんだけなぜそのような語り口ができるのか。「平和価値基盤」というものがあるという風に大きくとらえてしまう力量がなせる業ではないか。これまで読んできた白川さんや共産同の文章は、手放しにシールズ的なものに乗っかっていこうとしているように見えるのだが、それでは逆にこちらが不安になり懐疑的にならざるを得ない。武藤さんは、今までの運動と切れたところで若い人が出てきていて、やっぱり「平和が大事」といえるということは、薄く広く日本に基盤があるからだにとらえて、だからそこから反撃することが正しいんだと指示してくれている。基盤が露出したと言っている。そのとらえ方がすごいと思う。「平和価値基盤」が存在する証拠を、これまでの運動と切れたところでシールズが出てきたことに見出しているのは、なんというスケールの大きな逆転の発想で



あることか。

・ 「われわれは、戦後国家への抵抗を表す少なくとも二つの歴史的運動圏の解体を見てきた。しかし「圏」が解体しても、社会的抵抗としての運動は消えたわけではなかった。むしろ運動、あるいは人々の活動は、個別課題や地域に根ざして続けられ、新しく出現し、多様な形態をとりつつ広がり続けた。80年代には反原発運動が大きくもりあがり、裕仁天皇の「Xデー」にかけて反天皇制運動が脚光を浴びた。そして、その後の30年は、大規模な戦争、多くの体制の崩壊、重大な事故、自然災害が次々に起こる社会的地殻変動の時代にはいった。しかし私は、この激しい変動と運動圏の明確な境界の消滅のなかで、むしろ逆に、日本本土社会において戦後期から積み重なって生成されてきた基盤的平和価値と呼んだもの、いやむしろ平和価値基盤と呼べるものが露出してきたと考えている。フクシマ破局以来の社会の下からの流動化といのちを守る自立した活動の噴出、その基礎の上に空前の継続的国会デモの形をとった安倍政権との対決が、その基盤を可視的にしたのである。・・・若い世代は、当たり前のようにその基盤に接続し、直接その上に立って、安倍政権の政治に対抗しようとしていると見える。彼女ら、彼らの言葉の新しさと、推論の戦後的古典性の結びつきに私は新鮮な驚きを覚える。」——として、その旧世代との断層、つまり二つの運動圏の消滅を経ても今日のような運動状況があることを、なおも肯定的にとらえる徹底した楽観主義。今は「平和価値基盤」と呼べるものが露出してきた段階であるが、それを本当に武器にしてこれから戦うんだぞといってくれている。

### 3、 「平和価値基盤」のウイークポイント

・ しかし、その薄く広く積もった「平和価値基盤」の一番のウイークポイントは、自分たちがかつてアジアを侵略し植民地支配した加害者の末裔でありながら、その加害者性をどのように清算すべきかにまで考えが及ばない、主に被害者性の上に立った平和主義であるというところである。今回の盛り上がり「新しい21世紀の安保闘争である」と僕らがとても言えないのは、その点にある。加害者性にまで考えが及ばないままに、現状肯定的に個別的自衛権や安保体制そのものを認めていけば、早晩、足元をすくわれるだろう。この盛り上がり「新9条論」のように「個別的自衛権は守ろう、あとは譲るまい」というようなところに横滑りして、すべて持っていかれる可能性がある。

・ 武藤さんも、そこは冷徹に見ている。「さきのSEALSの趣意書は「先の大戦による多大な犠牲と侵略の反省を経て、平和主義／自由民主主義を確立した日本には、世界をリードしていく、強い責任とポテンシャルがあります」と言うが、これもひどく甘くはないか。戦後日本は本当に「侵略の反省を経」たであろうか。「平和主義／自由民主主義」を確立したであろうか。それならなぜ安倍政権のようなものが現れたのだろうか。むしろ安倍政権の出現を許した日本は「多大な犠牲と侵略の反省を経て平和主義／自由民主主義を確立」することに失敗したことを示しているのではないか。そういう日本が「東アジアの軍縮・民主化の流れをリードしていく責任」などを買って出るのは気恥ずかしくはないか。」と言っている。

・ 時代は、運動の盛り上がりを根こそぎ持っていかれるか、薄く広く積もっているものを武器として研ぎ澄ませて戦うか、というぎりぎりのところにきている。まさにそれが、「原理対原理のたたかいにしなければならない」という意味だろう。いろいろな層や、いろいろな出自・背景がある運動をすべて、憲法平和主義原理という基盤の上に立たせ、集約できるかということにかかっているのだろう。

#### 4、 誰がどのようにして諸運動を集約するのか

・ しかし、それを集約するというのは誰がどこですか。

武藤さんは、「実に多様な民衆経験を、それぞれの固有性をほぼどめたまま、呑み込み、保持し、発酵を促すかなり厚い社会的土壌層として存在しているのである。起源を異にする諸潮流はそれぞれの流儀で憲法を参照点としているが、お互いの交流と相互作用は始まったばかりである。この基盤は、今日安倍政権の安保、沖縄、原発政策を拒否し、行動するますます増えつつある人びとの行動のなかに、そしてその間のつながりのなかに存在する。それは国会を囲む重層的な運動世代のなかに存在する。そこにはたしかに共通の基盤が露出している。しかしこの基盤は、ある原理を表しているだろうか。イエスであり、ノーである。」 と言っている。

つまり「イエス」を拡大するには「ノー」を「イエス」に変えていかなければならない。現状では、「始まったばかりである」とか「可能性が生まれた」「必要性が示唆されている」という言い方にならざるを得ないのだろう。「ノー」を「イエス」に転換することは、日本国家をもう一度民衆の手で再構成するというに等しい問題なのだと思うが、それを誰がどのようにしてするのかというところが気になる。

・ それは、「加害者性」の認識の問題ではないか。歴史認識のところが一番のかなめなのであり、歴史認識に関わる運動と他の運動が、どのように出会うのかということだろう。今回の盛り上がりには、運動的な出会いがまだまだ足りなかった。集まった人たち同士の間の人とのかかわりが乏しかったのではないか。運動同士の出会いによる横のつながりを本当に創らなければ。それは、私・たちが言ってきた「路上の群集評議会」から「路上の民衆〈ピープル〉評議会」へと生成変化させるという夢の実現へと繋がる。

・ 若い学生たちが自分と政治との回路を直接つないだことはすごく画期的なことだとは思いますが、既成左翼がこれからも既成政党に依拠していくつもりなのか。また、それにも集約されなかった人々が、「民主主義ってなんだ」というシールズ的な声に全く疑問を持たずに称賛していると考えすることは、やっぱり無理があるのではないか。シールズでもなければ既成政党でもない人たち、象徴的に言えば、〈68年〉のノンセクトラジカルの世代は一体、今どうしているのか。「加害者性」の認識の問題にしても、〈68年〉の中から生まれているはずである。このような状況に陥っているのは、彼らの責任が大きいのではないか。

#### 5、 「起源を異にする諸潮流の交流と相互作用は始まったばかり」？

・ 武藤さんは、民衆の運動実践としてつくられてきたもの、安保であれ、沖縄であれ、原発であれ、戦後責任であれ、そういうものに依拠していかなければいけないと言っている。武藤さんは最後には民衆が勝つんだという、凄く大きな楽観主義に立っている。しかし、そこには怖い面もある。

「戦後的平和運動の経験も、広義新左翼の獲得物も、フェミニストの価値も、エコロジー運動の経験とスタイルも、原発・核をめぐる闘いも、若い世代の恐れと怒りも、これら、またその他、実に多様な民衆経験を、それぞれの固有性をほぼどめたまま、呑み込み、保持し、発酵を促すかなり厚い社会的土壌層として存在しているのである。起源を異にする諸潮流はそれぞれの流儀で憲法を参照点としているが、お互いの交流と相互作用は始まったばかりである。この基盤は、今日安倍政権の安保、沖縄、原発政策を拒否し、行動するますます増えつつある人びとの行動のなかに、そしてその間のつながりのなかに存在する。それは国会を囲む重層的な運動世代のなかに存在する。」——しかし、日本だけだろうか。かつて存在したすべての反権力運動が、超えられないままに残っていて、なくなっていないのは。先に取り上げたように、ほとんど実体のないままにあれだけの大言壮語をする新左翼の生き残りが今でもいる。Aのものが次の段階に来たらBに組み込まれて、BはAを含んで豊かなBになり、また次の段階に来たら、CがBを含んで、AとBを含んだものとして豊かなCになるというのではなくて、いつまでたってもAもBもCも並列的にある。それが、このたびは一緒に全部出揃ったというようにあるということを行っている面もあるのではないか。つまり、固有性をほとんどどめたまま、新左翼の生き残りも、共産党も、何でも並んで存在している。そして「お互いの交流と相互作用は始まったばかり」という。本当にそう言えるのか。

・ 「ノー」のところでは、こう言っている。

「私たちが、まだ共通基盤を豊かにし、原理を形成するプロセスの始まりに立ったにすぎないと思われるからである。多様な背景の人びとが寄り合う巨大な国会デモの形で表現されたピープルの力は、社会の中に基盤的平和・民主主義価値を共有し、保持し、発展させる新しい民衆の自立圏とでも言うべきものが形成される可能性、いやむしろその形成の必要性を示唆しているように思われる。」——私はこの「ノー」のほうばかりが気になってしまう。そして、これだけはっきりと武藤さんが示してくれているのに、手足の動かし方としてそれを運動の言葉に翻訳できないのがなさけない。

## 6、 多様な運動を収斂させる先は？

・ 多様なものが多様なままに共存していることは、運動論的にはあり得ないのではないか。Aをやっている人がBを見て、「多様にやっていますね」とは言えない。自分はAがすべてであると思ってやっているのであり、「あれもありますね、これもありますね」ではない。武藤さんの立っている位置は、それを含みこんだところにある。自分はAやBのところ、あるいはAにもならないようなところに立っているのかもしれない。この立ち位置の違いを思う。

- ・ しかし、そんなに違いを決定的に考えなくても、そういうもう一つの視点が、AやBの運動者の思考の中にあるということもあり得るのではないか。反安倍でいろいろな出自をもった運動者が集まってきて、今は歴史認識の問題で重ねて考えた方が、展開していくうえでより効果的ではないかというように、話し合うことができる端緒についたととらえるべきではないか。
- ・ 言われていることはその通りだが、例えば、日本国民が負ってきた巨大な負をどうやって清算していくのか——それを日本国家の構成の仕方としてとらえ返していく必要がある。そのことは、今回の「戦後70年談話」に対する一大運動として表現されていたか。そうではなかった。それも、ワンオブゼムにすぎなかった。「いろいろな運動があります。それぞれがそれぞれのものを抱えたまま、横並びに並びました」ということに現状は近い。共通の認識はいっこうに広がらない。
- ・ お互いの交流と相互作用がさらにこの後深まっていき、〈ピープル〉の力が「新しい民衆の自立圏として形成されていく可能性、いやむしろその形成の必要性を示唆しているように思われる」というのはその通りだと思う。明治以後日本の近代の形成期から現在まで連綿と継続されてきた植民地支配の実質を、あたかも植民地支配をしていないかのように見えなくさせている。自分自身をいわば植民地化することで自分の中で植民地支配が行われていることを見えなくさせてしまう。そういうことをいかに壊すかということに多様な運動を収斂させるべきではないか。
- ・ しかし、どんな運動をやっている人だって、自分がやっているその運動が日本を総体として変え、世界に向けて日本を開いていくものだと思ってそれぞれがやっているはずだ。それぞれ頑張っていることを、ある一つの価値で切るということでもいいのか。
- ・ 憲法平和主義ですべての運動を収斂させるには、狭く取らずになるべく大きく運動の基盤的価値を置く必要がある。例えば原発であれ何であれ、憲法平和主義に触れるものとして立てることが、基盤を豊かにしていくことにつながると思う。憲法平和主義を原理化するためには、絶対に脱植民地化回避システムを問題にしなければならない。そういうことをそれぞれの運動が意識して交流し、話し合っていくことが大事だと思う。

## 7、 いかに〈ピープル〉になるかという問いが生まれて初めて繋がりが生まれる

- ・ そういうことを可能にするためには、個々の運動が固有の課題を追い詰めていくその過程で、いかにそれを担っている自分たちが〈ピープル〉になれるか、そういう問いがそれぞれに生まれなければならない。それを抜きにして横のつながりが生まれることはない。統一指導部があるわけではないのだから。そういうありかたが否定された上で、自分にとって必然性のある運動をそれぞれが選んでいる。選んでいるものを推し進める中で、いかに自分たちは〈ピープル〉になるかという問いが生まれることで初めて、隣りにも〈ピープル〉になることを考え

ている人たちがいるんだと思えて、運動同士のつながりが生まれる可能性が出てくる。武藤さんは、そういう風に進むしかないのではないかということ、その手前のところの言い方で言っているのだと思う。

・ 「多様な背景の呼びとが寄り合う巨大な国会デモの形で表現されたピープルの力は、社会の中に基盤的平和・民主主義価値を共有し、保持し、発展させる新しい民衆の自立圏とでも言うべきものが形成される可能性、いやむしろその形成の必要性を示唆しているように思われる。」というところでは「新しい民衆の自立圏」というのは、〈ピープル〉が生まれるありかたの可能性を言っているのではないか。つまり、「民衆の自立圏」が豊かに形成されることに応じて人々は〈ピープル〉になるということだと思う。

・ 武藤さんは、この文章で沖縄以外で〈ピープル〉という言葉を使ったのは、ここの1か所だけである。そのことをどういう風に考えるかということとはとても大きなことだ。〈ピープル〉が生まれてくる／〈ピープル〉を創り出すプロセスを内在したものとして、「新しい民衆の自立圏」と言っているのだと思う。それを今後創っていくこと。多様なものが相互にぶつかり合い交流し、その中からそういうプロセスを含んだ自立圏を確立していくことが必要なんだと言っている。可能性を超えて必要性として今見えてきたのだから、それをものにしなければいけないと言っているのだ。

・ その通りだが、多様なものが多様なままというときに、そんなに見事に溶け合って行かれるだろうか。

・ 武藤さんは、この論文と併せて、PP研のホームページに掲載されている「代案は存在し、すでに提起されている」という論文の中で、「時間（＝歴史認識）と空間（＝世界認識）」ということ、を言っている。大きな時間と空間の中にそれを一旦置いてみようということだ。これは、それぞれの運動をやっているものへの提起ではないか。自分の取り組んでいることを、一度大きな時間と空間の中に置いてみよう。そのことで見えてくるものがあるはずだと提起している。時間というのは、日本で言えば明治初期からの近代化と対になった植民地支配の歴史から、世界史的には15世紀のヨーロッパ諸国による奴隷制の始まりからだと言っている。空間というのは、日本のことだけではなくて日本とアジア、あるいは「第3世界」とヨーロッパということがダーバン会議では入っている。その世界史の中に、近代以降の日本とアジアの逆立ちした接合の仕方の問題も合流させるということ、そこでは言っている。そうしなければ脱植民地化回避システムも浮かび上がってこない。原発であれ沖縄であれ何であれ、そういうところに置いてみることで、共通に話ができる基盤を創ろうということだろう。大きなところに置いてみるのが、これからの運動の一つの方向性になるのではないか。

## 8、 「原理対原理の対決を闘うとはどういうことか」という巨大な問い

・ 今回の「安保＝戦争法制反対」闘争の盛り上がり、日本の運動に対してもった意味というのは、今後の安倍との闘いを、原理対原理の対決というところに置くべきなのだということが

いよいよ決定的になったことである。どういう領域に取り組んでいる運動であれ、そういう平面に置いたとき、自分たちがどこにいてそれをどこに向かわせるかということを考えざるを得ないし、他の運動ともお互いにそれを考え合うべきであると、武藤さんは言っているのではないか。

- ・ 日本の運動は総体として、原理対原理の対決を闘うとはどういうことかという巨大な問いを立てるに至ったのだと、武藤さんは言いたいのだ。この闘いを通して、日本の民衆運動は巨大な問いを問いとして立てたんだという言い方は、普通の人ではなかなかできない。

- ・ 武藤さんは、80年代の安保闘争とは何か、あるいは90年代の安保闘争とは・・・というように、ずっと一貫して問いを投げかけてきた。今ここにきて、原理対原理の対決として安倍を倒さない限り、何をしたことになるというのか、倒し方によって、倒した後に見えてくる世界は違うんだということまで言っている。2015年に至ってやっと日本の民衆運動はそのような大きな問いを持つに至ったのだと、言わば警鐘乱打している。そういうものとして受け止めるべきなのだろう。

- ・ その巨大な問いを自分のところにまで引き寄せる引き寄せ方が、まだうまくわからない。しかし、武藤さんにしても、三原理で戦後日本国家が構成されているのだという分析のところから、その中の一つの原理を使って他の原理を原理的に倒すと言い切るところにまで、遂に到達したのではないか。

- ・ 「いま私たちは切実に討論に耐えうる言語を必要としている。言語、とくに政治的言語の退化、劣化は、国会の質問や答弁の水準にもっともひどく表れている。それに対して、若い発言者たちが、自分固有の感性と政治テーマをきちんと論理で結んで語り始めたことに、私はトンネルの出口が見えてきたときのような興奮を感じている。」——ここを合わせて読むならば、「民衆の自立圏」というのは、民衆の自立した言論圏のことだとも言えると思う。そういう意味での言語というもので、自分たちの問いを絶えず立て直し、その問いの先を言語によって開いていく、そういう営みが必要だと言っている。この後さらに運動の問題として引き寄せるには、「基点」に根差して「基点」を豊かなものにしていって、巨大な問いにその「基点」からにじり寄っていく回路をお互いの「基点」から作り出していくことが必要なのではないかというところに行くべきなのだろう。

## 9. 〈ピープル〉のイメージを「叛乱」としてとらえたいわけ

- ・ 自分は〈ピープル〉のイメージを「叛乱」として考えるところがある。しかしそれでは時間的な幅が狭く、時間性を帯びない。それに対して武藤さんの〈ピープル〉は、巨大な時間を背負っている。自分はそういうものとしてなかなかとらえることができないでいる。何で国会を包囲するだけで終わるのか。「自分たちが国会の中に入るんだ」とか、「自分たちが国会なんだぞ」とどうして言わないのか。そういう風に思うのは、〈ピープル〉を巨大な時間の中で考えていないからだとも言える。川が氾濫するように人々が「氾濫＝叛乱」という、そういう

ところだけで〈ピープル〉をイメージするのは、よくないのかもしれない。

・ しかし、Ⅰ. で話題にしたように、あのペルーから来た男が生き＝行きあぐねていた街頭から、「国会前」の路上は、はるかに遠い——この目もくらむようなはるかな距離を、一足飛びに引き寄せようとする衝動のようなものを栗原康なんかは「蜂起の思想」と呼んでいるのではないか。当然、この列島上に生きる何者も排除されるべきではない。少なくとも、「国会前」の路上と、この富山の路上と、ペルー人が人を刺した路上とは繋がっているはずである。その距離をぐっと詰める、つまり時間と空間の秩序をゆがめて縮めてしまえるのは、〈ピープル〉の叛乱以外にないのではないか。よって、私・たちのイメージする〈ピープル〉は、〈路上〉に出たきりになって自分の属性から解き放たれ、何者でもない者として新しい秩序の一構成員になるのだ。

・ 運動の水位が上がったときに、川が決壊し、「氾濫＝叛乱」が起こる。そういう意味では、プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」というのは、予測不能であり、言語矛盾ということになる。まあ、それを自覚しつつ港千尋の「革命のつくり方」に倣って言っているわけだが。

## 10. 〈68年〉の運動の系譜をなきものとするわけにはいかない

・ 「氾濫＝叛乱」ということと言えば、60年安保闘争や〈68年〉の闘争は、戦後史の上で欠かせない。今回の「安保＝戦争法制反対」闘争の闘いは「議会制民主主義＋外の運動」という図式をきっちり守って行われた。特にシールズのような若い人たちが、〈68年〉を飛び越して、60年安保闘争時の丸山真男にシンパシーを感じていることは、先祖返りしているようで、やっぱり納得できない。

・ 武藤さんは、「彼女ら、彼らの言葉の新しさと、推論の戦後的古典性の結びつきに私は新鮮な驚きを覚える。」と書き、「彼女ら、彼ら」の〈68年〉の飛び越え方を、逆手にとって、〈68年〉がすっぽりなくても平和的価値基盤へのアクセスが可能であることを証明するものとして使っているが、〈68年〉を運動的に継承していないことの問題は、やはり大きいのではないか。

・ 武藤さんは、〈68年〉をこのように整理している。

「日本の場合、戦後民主主義は、一九六〇年代半ばを過ぎると、思想的、政治的、文化的に敏感な若い世代にとって、守るべき価値と言うより、支配体制そのものとして意識されるようになっていた。全共闘運動という形で出現し、学園占拠・バリケード封鎖という激烈な形で全国のキャンパスを巻き込んだ新しい形の学生運動は、進歩的教授をふくむ教授会権力に象徴される学園内の権力関係を、その権力の働く現場において変革することを求める運動だったと言えるだろう。全共闘は、戦後の学生運動を代表してきた全学生参加の学生自治会から成る全学連とは違って、自発的な個人参加の行動委員会の連合として組織された。その点ではベ平連運動に似ている。この時期の後期には、男支配の社会関係に組み込まれた女性への差別・抑圧—運動内のそれを含めて—をその場において覆すことを掲げてウーマンズ・リブの運動が出現した。日本帝国主義の支配を背景にもつ在日朝鮮人・韓国人、中国人への民族差別が、当事者の告発

により日本の運動者の意識に強烈に突きいれられたのもこの時期である。この時期の特徴の一つは、こうした新しいスタイルとエートスをもつ運動に並んで、革命をめざす新左翼諸党派—多くは古典的な前衛主義で組織されていた—が、政治課題をめぐって警察権力と激しい街頭闘争を展開し、それが、運動全体に強い影響を与えたことである。もう一つの特徴は、急速に膨張をとげた資本主義による破壊的開発にたいして農民、漁民、都市住民などによる抵抗が沸き起こったことであった。そのなかで水俣と三里塚の闘争が全国的な焦点となり、大きい運動空間が形成された。」——つまり、今日の日本の運動に繋がる問題意識や運動は、全てこの時期に出揃っていたと言っても過言ではない。

・ この〈68年〉の運動の系譜をなきものとするわけにはいかない。そういう私・たちの思考の先は、Ⅰ.で話していた、「生」の困難を抱え、その声の社会的表出がままならぬところで「安保＝戦争法制反対」へとなだれ込んでいく者たちの思いを、今回のこのやり方で汲み取ることができるのかという問題、そして、「ペルー人」の在りようとのどのように繋がるのかという問題へと行き当たる。

つまり、〈68年〉の闘争を踏まえるならば、議会制民主主義は「守るべき価値と言うより、支配体制そのものとして意識され」なければならないし、日々の「生」をいとなむことの困難は、社会的な平面に投げかけるべきものだと分かるはずだし、「ペルー人」の表出している「社会的なもの」への飢えは、列島で暮らすすべての住民の問題であると、にわかにながごとくしてそれを共有できるはずである。

しかし、今回の「平和」が壊れる不安や安倍が引き寄せる戦争への恐怖と、若い人の日々の「生」の困難やあのペルー人の「社会的なもの」への飢えは、接続されているもの、あるいは包括されているものとは、やはり思えない。

・ 打倒すべきは安倍政権である。それを「原理対原理の闘いで倒す」という武藤さんのダイナミックな打ち出し方に惹かれる。自分も、その闘いの隊列に加わりたく切に願う。そのためには、〈68年〉から続く運動の系譜を踏まえて、常にその運動を大きな時空間の中に置きながら、ダイナミックな運動間の「交流と相互作用」を通じて、憲法平和原理をより広く深く、豊かで強力なものに鍛えていきたい。来たるべき、いや、引き寄せるべき、「氾濫＝叛乱」のときに備えて。